

今年度の取り組みの成果と課題

<p>日比野彰朗 (岐阜北)</p>	<p>成果 2年生の総合的な学習の時間と英語の授業の中で、長期にわたり「探究的な学び」について追求することができた。「探究」という活動に英語科としてどうアプローチができるかに挑戦できた。4、5月で教科書を通して発展途上国の現状を知り、6月からの総合的な学習の時間で、各班ごとに自分たちならどのような開発援助ができるかという視点でテーマ設定をした。また、JICA参加者の話を聞かせて頂き、イメージを膨らませた上で、探究活動に取り組んだ。10月には名古屋大学の大学院生に生徒の探究の成果を英語で発表する機会を設けた。その後の、生徒の感想（別資料）を見てみると、各々の生徒の中で、課題や成果を十分に感じられているようであった。最後に、11月に英語の授業内でパフォーマンステストとしてプレゼンテーションを実施した。探究的な活動によって、知識の活用の仕方や、答えのない課題にどう向き合うかという力を養うことができるように感じた。</p> <p>課題 知識のインプット量は減らしてはいけないので、ここは留意すべき点であると考え。今後、探求的な学習の時間と英語科の時間をどうやってより効果的に組み合わせることができるかを考えてきたい。</p>
<p>安藤万莉英 (大垣北)</p>	<p>成果 SQ3Rや批判的思考の活動を「読むこと」を中心とした授業に取り入れたところ、生徒がより主体的に考えながらテキストを読むことができた。自分の意見と他人の意見を比較したり、自分の読解の仕方を振り返ったりすることで、生徒の思考力を引き出すことができた。これからも実践を継続したい。「読むこと」の指導は、これまで、文法事項や語彙をどう教えるか、音読やリテリングをどう指導するかに注意が向きがちであったが、この授業で生徒に何ができるようになるかを考えて授業を設計するようになった。また、研修中、自身の研究のために多くの文献、HP、イギリスで使われている教科書に目を通したことから、帰国後もリサーチを欠かさず、授業に取り入れるようにしたこと、特にイギリスの教科書から発想を得て、より自然な言語習得に近いコミュニケーション活動を授業に取り入れることができたことも研修成果の一つである。プロジェクターを活用した授業改善については、一定の効果を認めることができた。イギリスで様々なピア・ティーチングやプレゼンテーションを行い、自身の指導方法や授業の準備の仕方を振り返ったこと、指示の出し方、授業の流れ、ICTを用いた視覚補助のあり方、指導する姿が生徒の目にどう映っているかなど、教材研究だけでなく生徒との関わり方にも新たな視点を持つことができたことにより、より効果的なプロジェクターの活用ができた。</p> <p>課題 「読むこと」の指導上の課題は、生徒の振り返りに関わる「メタ認知」の場面を適切に設けることである。今回の授業では、意識して設けたつもりではあるが、まだ十分でないと感じている。生徒が学習方法や内容を振り返りながら学習することで、生徒の自律的な学習につながり、最終的に内省が深まり、思考力が深まる。今後は生徒が授業でどのように自分の学習内容と方法を振り返っているか、またその手立てや補助について考えていきたい。また、1つ1つの活動は上手くいくが、どのように活動をつなげていくか、あるいは活動の幅を広げていくか、その中で内容の定着を図っていくかも今後の課題である。</p>

西川かおり
(加納)

(1) ICT 機器の効果的な使用法の研究

(ア) 導入時

成果 ①事前に問いを与えたこともあり、食い入るように動画を視聴し、速やかにペアワークで答えを確認し合おうとする学習状況から、生徒の英語学習に向かう動機づけとして非常に効果があったと感じた。生の英語に触れることができたこともよい刺激になったと思う。

②短時間でテーマの提示やポイントの解説ができるため、コミュニケーションの機会を増やすこともでき、自分の意見を英語で発することに対する苦手意識を弱めることができた。投げ込みで使用できるようなパワーポイントの教材もいくつか蓄積することができ、他の教員にも使用してもらうことができた。

課題 ①YouTube などからダウンロードした動画を使用することが多かったため、自分で動画に関する問いを作成する必要があるため、時間がかかった。動画とワークシートなどがセットになっているような教材があればより多くの教員が取り入れることができると考える。

②一人ではあまり多くの教材を作成し、蓄積することができなかつたため、今後は他の教員とも協力して、積極的に共有できる教材を作っていきたい。また市販のものでそのような教材がないか、教材の収集もしていきたい。

(イ) 本文内容の retelling

成果 ICT 機器を取り入れることで、必要なヒントを即時に、必要な分だけ提示することができるようになり、その場で生徒の理解度に合わせた即興性のある活動ができるようになった。もともとは人前で英語を話すことに抵抗があった生徒たちだったが、必要な場合にはヒントを与えてもらえるという安心感のもと、物おじせずに英語を発することができるようになった。最終的には絵だけをヒントに自分の理解した内容を英語で説明できるようになり、達成感を感じられるようになったという声もあがった。

課題 教材作成に時間がかかり、他の教員からするとチャレンジしづらいと感じる部分がある。單元ごとやセクションごとに分け、他の教員と協力して、より多くの教材を蓄積できると、一人当たりが作成にかかる時間を大幅に減らすことができ、より多くの教員が気軽に使用できると思う。

(ウ) 生徒の課題の共有時

成果 最初は調べ学習をやってこない生徒も数名いたが、毎時間選ばれた生徒が発表することでよい緊張感と臨場感のもと「自分もきちんと準備して発表したい」と思う生徒が増え、最終的には課題を全員が準備してくるようになった。また、他の生徒が調べてきた知識もその場で複数共有することができ、「面白い」「もっと知りたい」という知的好奇心を刺激できたように思う。どんな内容の発表であっても、ICT 機器を使用すればこのように簡単にクラスで共有することができるのは大きなメリットである。また、あえて英語が苦手な生徒にも発表する機会を与え、本人にも自信をつけ、周りの生徒にも「自分も頑張ろう」と思えるような機会を多く与えられたことも、生徒の意欲の向上につながったと感じる。

課題 課題・発表のバリエーションが非常に少ないため、他の教員とも相談し、多くの教員の発想を生かして課題や活動を考え、蓄積していく必要がある。

(2) 表現活動の研究

成果 6月から時間をかけて進めてきたこともあり、もともとは英語で発言するこ

とに抵抗があった生徒も少しずつ慣れ、さらには自分の意見を自分が集めてきたデータを根拠として論理的に述べるという、当初は高度に感じられた活動にも積極的に取り組めるようになり、生徒自身の自信につながったと思う。また、感覚として、「表現することができた」という感覚は、達成感や知識欲に結びつきやすいということもわかった。

課題 こうしたスモールステップはある教員だけで行っても効果的でないため、他の教員とも共有し、学年全体で取り組むようにしたい。また、段階に応じて取り組める活動も、一人の発想ではバリエーションが少ないため、他の教員とアイデアを出し合って、可視化し、系統立てて取り組めるようにしてけるとよいと感じた。

(3) 課題のあり方の研究

成果 家庭での調べ学習→授業での発表という流れは、生徒の知的好奇心を刺激するきっかけとして非常に効果的であった。あまり積極的に課題に取り組む姿勢のなかった生徒も、準備をしてこなければ次の授業で自分が困ると感じて、自然な流れの中で、課題に取り組むようになった。必ず全員が時間を取り、自分の言いたいことを補強するデータを自ら探してくることを必ず全員が経験できた結果、新しい知識を得ることの面白さや自分が言いたいことを論理的に述べることができたときの達成感を味わう生徒が増え、その後の学習に対し、前向きな取り組みのできる生徒が増えたように感じる。

課題 一人の発想ではこのような課題のバリエーションが非常に少ないため、他の教員とも相談し、多くの教員の発想を生かして課題や活動を考え、蓄積していく必要がある。

成果 <オーセンティックな教材の活用>

動画を中心とし、それらを各レッスンの導入教材としてうまく活用できたと感じている。レッスンに関する背景知識が何もない生徒に対して、内容についてのイメージを持たせることで、興味関心を高め、内容の理解を深めることができた。また、実際の言語の使用場面に触れさせることで、教科書の音声スピードが本来の会話やスピーチのスピードと大きく異なることに気付かせることができた。

<自己表現力の強化>

授業の冒頭でのスモールトーク（スピーキング）やレッスンの内容に関わる意見やサマリーを書かせる（ライティング）ことを継続した。またそれに加え、英検のライティングトピックを参考にしたテーマで週間課題としてライティング課題を課した。継続的な取り組みにより、会話の継続やまとまりのある文章を書く力とそのスピードが向上した。

課題 <オーセンティックな教材の活用>

動画の内容と本文の内容があまりマッチしていなかったり、本文の内容とあまりにも似ていて本文を読まなくても内容がわかってしまったりすることもある。適切な教材を見つけ、どの場面でどの部分を活用するかを考える必要がある。また、今年度は動画を導入で活用することが多かったが、生徒の理解をより深めるためには、授業の最後に発展的な内容の動画を見せ、それに関する意見を述べたり書いたりする活動も可能である。生徒の深い学びにつながるような仕組みを考えていきたい。また、動画に限らず、新聞記事や雑誌などの読み物も教材として活用できるようにしていきたい。

林ちひろ
(関)

	<p><自己表現力の強化></p> <p>表現力については、分量を増やすことはできるようになってきているが、質を高めるためにはまだまだ工夫と時間が必要であると感じている。繰り返される基本的なミス（コンマのあとが大文字になる、段落の初めが下がらない）の改善や話の一貫性を高めるための方策を模索していきたい。</p>
<p>林正幹 (恵那)</p>	<p>成果 ・ Reading : センターに対応する力と、記述式入試に対応する力のバランスが取れた授業を実施することができた。</p> <p>・ Speaking/Writing : 研修で得た知識を使って、Reading の読み物を、Speaking や Writing に派生させる試みをいくつか実施することができた。</p> <p>課題 ・ Listening→Reading で扱う英文をリスニング対策として使いにくい。共通テストに対応できる高いリスニング力をどのように育成していくか。</p> <p>・ Speaking→外部試験利用の在り方の変更を受けて、Speaking の取り扱いをどうしていくか。</p>
<p>高田敏博 (中津川工業)</p>	<p>成果 昨年度の Retelling 活動では、Step1 として内容に関する簡単な質問に答え、その解答をもとに Rephrase して Retelling を行う活動を行ったが、今年度は、Step1 で、『考えて書く』ことに注目して指導した。Retelling を行うにあたって、自分が必要だと思う Key Sentence を抜き出し、その文をより簡単に、さらに複数の文で書く Paraphrase 活動を行ってから Rephrase、Retelling へと繋がる活動を設定した結果、当初は戸惑いながら書いていた生徒も、回数をこなすことで、徐々に書くスピードが上がったり、豊かな表現を用いて文を書いたりできるようになってきた。設定された最終目標が『相手に内容を伝える』であることから、分かりやすく、正しく、簡潔に文を作ることに力を注いだ生徒が多かったと見ていて実感した。この Retelling 活動を、授業の導入の段階で、前時の復習として行うことができる学校もあると思うが、本校の生徒にとっては非常に Challenging な活動であり、伝わった時の喜びも大きいものだと考えている。</p> <p>課題 今後もこのような活動を行う場合に、設定してあるスモールステップを少しずつ外しながら、Retelling を行うことができるようにしなければならない。ICT の活用については、タブレット端末を生徒が使用して行う授業を実践したが、紙を使用する活動の方が望ましい場面も多くあった。また、NAS（ネットワーク共有フォルダ）への接続方法等の設備の説明に少々時間がかかることもあり、うまく使用できれば便利な反面、生徒の ICT 機器への慣れが必要であると感じる。</p>